

## 後 記

昭和23年(1953)11月22日で、岡山大学温泉研究所もこゝに10周年を迎えた。敗戦の色濃い昭和18年(1943)、岡山医科大学放射能泉研究所として生れ、敗戦後の苦しい時期を、大島所長を中心に創設期の各研究員はささやかなる設備と田舎であるとゆう不利、不便をしのいで、唯々研究意慾をのみ唯一の武器として研究に専念して来た。そして残された業績は前所長大島教授の「回顧と所感」より窺われると思う。そしてこの一文よりもわかる通り、この10年間は大島所長と共に発展し、あらゆる意味で、研究所の業績は即大島所長の業績であると言つても過言ではあるまい。

ところがかゝる研究所に於ける研究業績は唯単なる結果より推察する以上の幾多の困難も克服して初めて成しとげられるのであるが、それは研究所を作りながら研究しなければならぬからである。この間になされた研究所の施設拡充の主なもの、三朝温泉の中心部に研究所分室を入手し、温泉化学部門の研究室を増設した事であろう。又研究所の源泉を新しく掘鑿し、導管の本格的な改修とゆう多年の宿望が達成された。研究所の充実と共に段々狭隘になる宿舍問題の解決の一助として官舎も増設された。研究部門の膨脹と、併置されている医学部附属病院三朝分院の診療活動の活発化にともなう用水量の増大と共

に水源タンクの拡大を余儀なくされ、これも完成し、戦時中の荒廢が齎らした幾多の老舊筒所の復旧もあわせて着々と建設譜を奏でつつある。次に設備としては、皆無であつた化学部門の研究設備(分光分析装置、放射能測定用の各種の器械、ポーラログラフ、チゼリウス電気泳動装置、プルフリツヒ・フォトメーター、分光光電光度計、フレームフォトメーター等)並びに図書は全て新しく入手し、診療には勿論レ線障碍研究にも欠ぐ事の出来ないレ線深部治療装置は新しいものに入れかえられ、トモグラフも設置された。そして尙お吸入装置、レ線装置、麻酔装置を初めとして設備充実の足どりは一步一步前進しつつある。

更に特筆すべき事は研究所の特性を生かした地方文化への貢献であろう。大島所長自ら陣頭に立たれ、この面に努力された事は多くの人の知るところである。

これら幾多の足跡は大島所長を中心に横田浩博士を初め数多研究員のたゆまざる努力の賜であろう。之等各位の勞をねぎらい、こゝに更めて文部当局を初め岡山大学施設整備委員会、鳥取県並びに島根県衛生部の御援助御協力、岡山大学の学長を初めあらゆる部門の御援助御協力を謝し、研究所の事務部並びに三朝分院の方々の蔭なる努力に謝しつつ擲筆する。